

---

**魔法少女リリカルなのは** Blood Ruins Story

アニヲタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Blood Ruins Story

### 【Nコード】

N9980H

### 【作者名】

アニヲタ

### 【あらすじ】

借金の肩代わりとして仕方なく管理局の委託魔導士となった少年、藤見・九郎。これは彼の勇気と愛、そして、戦いの物語である。S  
TS再構成物。

## 第1話

どこまでも果てしなく広がる砂の海

砂漠

風はなく、空も晴天の霹靂で雲ひとつない

地平線には蜃気楼

その砂漠のど真ん中、ポツリと立つ影が一つ。

影は顔を隠すようにボロボロの布きれを頭から纏っていた。

「ココがクラナガンとかいう都市であるか？」

誰かに尋ねるように影はそう言った。

だが、彼の周りに人影はない

当然、その問いに答える者はいない筈であった。

が、

「馬鹿、どう考えたってあのクソ神父がミスったんだろ」

不機嫌そうな声

あるうことかその声は一匹の黒猫から発せられていた。

「なぬ、そうだったのであるか!？」

影の驚きように黒猫は

「おいおい、九郎、まさかとは思いがココがクラナガンの一部だとか思っていないよな」

「……」

九郎、と呼ばれた影は気まずそうに押し黙る

その様子を見た猫は妙に人間臭い挙動で溜息を吐いた。

「もう慣れたからいいけどよ、お前はもうちょっと賢くなれ」

不服そうな九郎は

「……馬鹿って言った方が馬鹿なのである」

ボソリと呟く。

ブチッ

何かが切れる音

「うっせーよ！お前が馬鹿だから馬鹿って言ってるんだ！」

吐き出される黒猫の怒声

そのポリュームは人間並み、いや、それ以上だった。

「そ、そんなに怒鳴らなくてもいいのである」

身を竦める九郎

だが猫の勢いは止まらず

「それもこれもお前がトラブルをあっちこっちから貰ってくる馬鹿で、しかも、その七割が人助けをしようとしてこっちが逆に巻き込まれてたじゃねえか！！」

更に続けて

「巻き込まれただけならいざ知らず、最後はだいたい皆巻き込んで爆破オチだったろうがー！！」

一息に言い切った

はあはあ、と肩を上下させる黒猫

「本当にすまぬ。次からはもう少し頭を使つてである」

九郎は素直に頭を下げる

「そつしる」

気が済んだのか猫は毛繕いを始めた。

「それにしても・・・」

と九郎が視線を落とした先には箱があつた。

黒く頑丈そうに作られたそれを見て

「この箱の中には一体何が入っているのでしょうか？」

「ん？そつといえばあのクソ神父は『レリック』って言ってたな」

「それは飲めるのであるか？」

興味津津と言つた様子で九郎は訊く

もし、今の彼に尻尾があつたならばブンブンと振り回されていただろう。

そんな九郎に対し

「馬鹿、酒じゃねえぞ」

と黒猫は無慈悲に答える。

シユンとなる九郎

青菜に塩とはこのことである。

流石に落ち込んでいる九郎を見ていられなくなったのか

「まあ、ちゃんとおつかいが済んだら酒の一本でも振る舞ってやるよ」

「本当であるか！」

いきなり元気になった九郎

現金な人間である。

「そのためにもこの『レリック』を、えーっと名前忘れちゃったぞ・・・」

「神父様は、管理局の職員さんに『チビたぬき』と言えば分る、と仰っていたのである」

「チビたぬき、って言うぐらいだ。きつとビール腹の中年親父だろ」

現在の二人の脳内では酒に酔っ払い千鳥足になっている中年親父の姿が再生されていた。

「とりあえず神父様に連絡を」

突然、九郎の腕が動く

その腕が高速で飛来したそれを弾いた。

「・・・危なかったのである」

弾かれたのは光の弾

光の玉を弾いたのは両腕に嵌められた無骨な鉄の手甲。

そして、

九郎の視線の先にそれはいた。

円を細長く潰したようなフォルムのそれは機械だ。

「アル、コイツらを知っているであるか」

静かに問う九郎

「ガジェットっていう自律機動兵器、それ以外は知らねえ」

「ただの機械であるか」

一人と一匹が言葉を交わしている間に三機のガジェットが合流した。

「アル、荷物を頼むのである」

「任せとけ」



スツ、と九郎が構える。

一瞬の静寂

それを先に破ったのは九郎

駆ける

それもガジェットへと突っ込んでいく

一直線に

対するガジェットは飛んで火に入る夏の虫とばかりにビームを撃ちだす

降り注ぐビームが布きれを掠り裂いていく。

しかし、九郎のその足が止まることはない。

寧ろ、更に前へ、と加速する。

ガジェットの一機がビーム連射を止め、突っ込んできた。

その脇から伸びるのは何本ものケーブル

鋭い音を立ててケーブルが襲い掛かる

とっさに体を捻りかわす九郎

ケーブルが布きれを大きく裂く

「破ッ！」

お返しとばかりに繰り出される右ストレート

過たずその一撃がガジェットを打つ

圧壊

その言葉をもって無残にひしゃげるガジェット

九郎が飛び退くと同時、ガジェットが爆散

爆風が布きれを攫う。

太陽の下、姿を現したのは丸縁の眼鏡を掛けた少年。

その少年は後ろで結わえた黒髪を靡かせながら着地した。

そこに二機のガジェットが突進してくる。

挟撃するように迫ってくるガジェット

かわすことは不可能

焦りの表情が九郎に浮かぶ

衝突する

その寸前

地面に浮かび上がる円形の魔法陣。

生み出されるは銀色の鎖

それは一瞬にしてガジェットボディに絡みつく

だが、そこで鎖の動きは止まらない

ギリギリと蛇の如く鎖がガジェットのボディを締め上げ

引き千切る

爆発を背に九郎は再び走り出す。

向かってくる九郎にガジェットは後退しつつビームを浴びせかけてきた。

地面を蹴り九郎は宙に舞う。

ガジェットは素早く狙いを定め

発射

空中にいる無防備な九郎を撃ち落とさんと光弾が迫る。

「ロードカートリッジ！」

右手に嵌められた手甲から吐き出されるのは大型のカートリッジ。

その九郎の右足に光が灯る。

放つ

蹴りを

それは宙に鮮やかな光の弧を描いた。

刹那

描いた弧が飛ぶ

光を帯びたそれは弾丸の如き速度で撃ちだされ

一閃

ビームもろともガジェットを真っ二つにした。

軽やかに九郎は着地

一泊遅れてガジェットが爆発した。

「危なかったである」

「ああ、確かにな」

九郎の言葉にアルもそう頷き

「さっさとおつかいを終わらせ、帰るっぜ」

「うむ、確かに。あと、吾輩としては『チビたぬき』というのを見てみたいのである」

「馬鹿ー、どうせただの中年親父に決まってるぜ」

と、その時

地面に魔方阵が浮かび上がる。

「・・・何か、とてつもなく凄く悪い予感がするのであるが  
心なしか九郎の顔が青ざめている。」

「同感、それでもよってそういう予感に限ってよく当たるんだよな  
そこからガジェットが現れる。」

一機や二機ではない。

何十機というガジェットが九郎達の前に一斉に現われた。

「あわわわ・・・ピンチである」

「くっ、どうする九郎！」

「いや、まだである・・・まだ『アレ』が残っているである」

キラリと九郎の眼鏡が光る

アルが息を飲み

「まさか、『アレ』を使うのか・・・俺らの最終奥義を！」  
と問うた。

「うむ」

肯定の返事にアルは頷き返した。

一人と一匹が軽く身構える。

「吾輩達の最終奥義・・・その名も」

隙のないその構えにガジェットも迂闊に動くことができない。

両者の間に張詰めた空気が流れ

それが徐々に高まっていく。

向かい合うガジェット達もそれを感じているかのように微動だにしない。

張りつめた空気が最高潮に達した。

その瞬間、

「戦略的撤退である!!!」

一人と一匹は脱兎の如く逃げ出した。

クシユン！

「風邪？」

「いや、たぶん、誰かが私の噂でもしたんやろ」

何やる・・・エライ腹立つようなこと事を言われたような気がするわ

薄暗い暗いへりの中、八神・はやてはそう答えた。

隣の女性、フェイトは心配そうにはやての顔を覗き込んだ。

「大丈夫やって、それよりも今は・・・」

とはやては宙に浮かぶコンソールに目を移す。

そこには青色の髪の少女とオレンジ色のツインテールの少女の姿があった。

画面の中、少女達に話をしているのは小さな少女

それも人の頭の顔程度の大きさだ。

彼女の名はリイン

その可愛らしい外見からは想像もつかないが彼女は一般に融合機と称されるデバイスである。

画面に映るのはある試験の様子

陸戦魔導士Bランク昇格試験

それがこの試験の名であった。

試験官はリイン

受験者はスバル・ナカジマ、ティアナ・ランスタ

説明が終わったのかリインが離れていく

刻まれるカウントダウン

終わると同時

二人の少女は走り出した。

「お、始まった始まった」と身を乗り出すはやて。

「お手並み拝見、っと」

画面の中、所狭しと動き回る少女達

ターゲットを撃破していくペースは順調そのものだ。



その様子にはやては微笑を浮かべた。

連携は中々のもんやね

フェイトも同じ感想だったのか

「いいコンビだね」

と言った。

「そやけど、難関はまだまだ続くよ」

はやては手を伸ばしコンソールを操作

展開された画

そこには丸い形の機械があった。

「特にこれが出てくると受験者の半分以上は脱落することになる最終関門、大型オートスフィアや」

「今の二人のスキルだと普通なら防御も回避も難しい中型自動狙撃スフィア」

「どうやって切り抜けるか知恵と勇気の見せどころや」

と

「はやて捜査官！」

コンソールに割り込んできたのは一人の女性。

その女性は管理局に務めるオペレーターの一人で、はやての知人でもあった。

「そんなに焦ってどうしたん？」

オペレーターの様子にはやては嫌な予感を感じた。

「ガジェットの転移反応を確認、場所は陸戦魔導士Bランク昇格試験の会場です！」

「何やて！」

思わず驚きのあまり大声を出してしまう。

更にオペレータは続けて

「同時にレリックだと思われる魔力反応を検知しました！」

レリック、ガジェットという二つの記号が結びつくより早く

「ごめん、フェイトちゃんちょっと外せん用事ができたわ！」

「えっ……？」

呆気にとられた顔のフェイト

それを置き去りにはやてはカーゴから飛び出した。

「ぬあああああああ！！」

九郎は走っていた。

自分のものとは思えぬ奇声が出ているが気にならない。

いや、正確にはしている余裕がない。

何故なら命の危機に瀕しているからである。

それも現在進行形で

肯定するよう後ろから飛んでくる何十発ものビーム

気のせいだろうか

さっきから服や腕、頭を掠める回数が増えている。

狙いが正確になってきているのであるか！

嫌な想像に冷汗を垂らす

「クソ！あいつ等転移してでも追っかけてきやがるなんて……！」

「！」

隣ではアルが必死に走っていた。

「アル、何か恨まれるようなことをしたであるか？」

「してねよ！お前の方が心当たりあるんじゃないかねえのか！」

そう言われ記憶の底を探ってみる。

昔から人に迷惑をかけて怒られたことはある。

しかし、恨まれるようなことだけは決してなかったと思う。

つまり、

「全く心当たりがないのである！」

「なら何で俺らが追われてるんだよおおおおお！！！」

と

「げ……行き止まりだ！」

アルのその言葉に前方を向くとそこには壁、否、崩れたビルが道を塞いでいた。

「撃ち抜いて道を作るしかねえ、九郎！」

「了解、任せるのである！」

デバイスを起動させる。

だが、

「あれ？」

ウンともスンとも言わぬ手甲

「まさか」

「おいおい、故障したってオチはないよな・・・？」

「・・・」

反射的に顔を逸らす

「凶星かよ、畜生おおおお！！」

と、その時

空より幾筋もの雷光が顕現

それは数十機ものガジェット全てを過たずに貫く。

貫かれたガジェットは表面に電流を迸らせ

爆散した。

たったの一撃である。

そのたったの一撃に数十機のガジェット全てが殲滅された。

その光景に唾然とする九郎

これほどの術を扱う魔導士とは一体・・・？

ゆっくりとその術者が空から降りてきた。

その姿を見て九郎は一瞬、我が目を疑った。

女の子!？

九郎の驚きを余所に

「大丈夫やった？」

と騎士甲冑に身を包んだ栗色の髪の少女は訊いてきた。

その少女を見て

!!

九郎はとっさに閃くものがあった。

それは

「あ、『チビたぬき』である!」

プツン・・・

切ってはならぬ線を切った。

そんな音であった。

「だ、誰が……」

「誰が『チビたぬき』や————!!」

二度目の雷撃が降り注いだ。

時空管理局放送委員会

九郎「という訳で記念すべき第一話なのである」

はやて「さっそくやけど。何で私、チビたぬきなん？」

その体から放たれるドス黒いオーラー

九郎「そ、それは・・・誰かさんのせいだと思つのである」

はやて「見つけたらただじゃおかんで・・・」

九郎（ひい・・・怖いのである、ガクガク）

はやて「ところでこのコーナって何のためにあるん？」

元に戻ったはやて

九郎「作者が何となくやってみたいから、というノリで始めたコーナである」

はやて「計画性のない作者やね」

九郎「うむ、そうであるな」

と、腕時計を見る九郎

九郎「そうこうしている間に時間になつてしまったのである」

はやて「どうせ、何もネタ用意してなかつたんやろ」

九郎は聞こえないフリ



九郎「ということ感想や評価」

はやて「勿論、クレームも受け付けとるよ」

九郎「はやて」では、また次話でお会いしましょう！！」

第1話（後書き）

## 第2話

燃えるように赤い空

その空に行くのは巣へと帰る何羽ものカラス

響く鳴き声はどこか寂しい

夕暮れ時、人気のない公園に影が一つ。

砂場にジッと蹲るその影は幼い少女のもの

それは黒く艶やかな髪的美少女

五、六歳ぐらいのその可愛らしい顔。

しかし、そこには不釣り合いな暗い蔭りがあった。

「どうしたのであるか？」

声がした。

ゆっくりと歩み寄って来た声の主は

「もしかして、お腹がいたいのであるか？」

心配そうに少女の顔を覗きこむ。

声の主は少女と同じ年頃の少年

その体はドロだらけで、頬にもドロを盛大に付けていた。

悪戯っ子という表現がぴったり当て嵌まる。

そんな少年であった。

「……」

少女は答えない。

「足が痛いのであるか？」

「……」

沈黙を続ける少女

「むう、どこか痛いのなら言わないと分らないのである」

少年は困ったような表情で考え始める。

「そつだ！あの手があつたのである！」

唐突に手のひらを打ち何かを思いついたかのように少年は言った。

「………？」

少年は唐突に人差し指を突き出す。

そして、

「痛いの、痛いの、どこかに飛んで行け、なのである」

会心の出来だ、と満足げな笑みを浮かべる少年

だが、

「………」

少女は何の反応も示さない。

寧ろさつきより他者を拒絶するような空気が出ていた。

「ぬづづ………これでも駄目であるか」

少年はめげることなく再び考え始めた。

と、その時

ベチヨ

湿ったような音

その音は少年の頭から生まれていた。

そこにはカラスのフンがちょこんと乗っかっている。

「う……う……」

涙目になりながらも堪える少年

男の意地である。

だが、

追い討ちをかけるように更に一つ落ちてきた。

過たずそれは少年の頭に直撃

馬鹿にするかの如く鳴き声を上げ去っていくカラス

ブヂッ

堪忍袋の緒が切れたのか

「覚えて居れー！今度捕まえたら焼き鳥にして食ってやるのである  
ー！！」

頭にフンを乗せ、涙目でカラスに向かって叫びを上げる少年

まるで負け犬の遠吠え

その姿に

「ぶつ・・・く、あはははは！」

笑った。

少女が

それはさっきまで蓄だった花が咲き開くような、そんな笑みであった。

「あ、笑ったのである」

その様子に少年は先ほどの不幸も忘れて喜び始める。

「痛いのが治って良かったのである、それにしても」

「・・・?」

「君は笑っていた方が可愛いのである」

少年が無邪気に笑いながら言ったその一言

サラリ、と言われたその一言に少女の心臓が大きく脈を打つ。

そして、

リング顔負けで真っ赤に染まる頬

「・・・どうしたのであるか？」

「ううん・・・何でもない」

首をブンブンと横に振る少女

「おーい、九郎ー」

公園の入り口から声がした。

そこにいたのは同じ年代の子供達、数十名。

「今行くのであるー」

走り去っていく少年の背

少女は寂しそうに俯く

夕焼けに背を向け、再び蹲ろうとした少女。

と

少女の腕が引かれた。

驚いた少女が顔を上げる。

「痛いのが治ったから、吾輩達と一緒に遊ぶのである」



そこには少年の顔があつた。

ぐい、と引かれる腕

一見、強引ともとれる行動

実際、少年は少女の了解を得ていない。

しかし、

笑っていた。

少女は不思議にも笑っていた。

心の底から

「そういえば君の名を聞いていなかったたである」

「私の名前？」

「うむ、教えてほしいのだ」

「私の名前は」

少女の口が開く。

その時、

地面が激しく揺れた

「な、何であるか!？」

又ツ、と地平線から巨大な影が現れる。

「こ、コイツは」

丸い耳

丸々とした胴

たぬきのヌイグルミを被った

それは

『誰がチビたぬきやー!!!』

と雄たけびを上げた。

「出たー!チビたぬきであるー!!!」

九郎の悲鳴が町に響いた。

「ハッ！」

冷水を浴びせられたように九朗は跳び起きた。

鼓動が早鐘を打ち、皮膚からは冷汗

「はあはあ・・・」

九郎の目に映るそれは白い部屋

清潔感に満ちたその部屋に流れるのは消毒液の匂い

二つのことを合わせて考えた結果

浮かんだのは、病院という文字だった。

さっきのは夢であったか・・・

その事実にあ堵のため息を漏らす。

(それにしてもさっきの夢で見た少女、あの少女の名は結局分らず  
じまいなのである)

否、自分は彼女の名を知っている。

ただ単に思い出せないだけなのだ。

それ以前に、何か重要なことが抜けている。

とても重要な何かを

「あれ？アルは」

九郎は相方の姿を探そうとして

「おはよう、よう眠れた？」

対面する。

栗色の髪 of 少女と。

反射的に

「あー！チビたぬ」

バチーン

言い終わる前にハリセンが顔面を張り飛ばす。

目にも止まらぬ速度で放たれたツツコミに九郎の体が仰け反り

ゴヂン

手すりが後頭部を強打

「あがたっ！」

思わず奇声を上げた。

「い、痛いのである！酷いのである！あんまりなのである！」  
涙目で痛みを訴えるが

「さて、何の事やる？」

知らんぷりをされた。

「くっ、流石は『チビたぬき』演技が」

シュン

バチーン

「あだあ！」

再び九郎の顔を張り飛ばすハリセン

その速さもさることながら威力も申し分なく

プロボクサーのジャブと十分タメを張れるだろう。

あ、頭がグワングワンするのである

「どうしたん、大丈夫？」

ワザとらしく聞いてくる少女に

「このチビたぬきめ！」

と九郎は漏らしそうになる。

が、

その後ろ手にスタンバイされているハリセンを見て口を嚙む。

何であるかそれは！！

鉄だった。

断じて紙ではない。

正真正銘の鉄だった。

もし、

万が一食らったとして、良かったなら脳震盪、悪かったなら内出血で死亡。

ハリセンに叩かれて死亡

そんな見出しと一緒に新聞の一面に乗る自分

そんなの笑い話にもならないのである・・・

「はやてちゃん何かこの子、様子が変だよ？」

「私もそう思う」

はやて、と呼ばれた少女の隣に座る二人の女性が言った。

「その少女が」

ハリセンを後ろ手にチラつかせるはやて

「いや、何でもないのである」

そう言うしかない九郎

互いに顔を見合わせクエスチョンマークを浮かべる二人の女性

「ところで猫を見なかったであるか？」

気になっていたことを訊く

「猫って、コレ？」

と金髪の女性が指し示す先には太ももの上で寛ぐアルの姿があった。

「おお、アル！無事であったか！」

ニヤー

猫のような返事が返ってきた。

「……」

「本当に人懐っこくて可愛い猫だよね」

「うんうん」

「さつきはお手とかもしとったし、賢い子やなあ」

スリスリと太ももに頬擦りするアル

「いい子、いい子」

ゴロゴロと喉を鳴らす

「・・・あ、苺パンツが浮いているのである！」

刹那

閃光の如く猫が動いた。

「どこだああああ！苺パンツは、何処にあるんだああああー！」

窓から身を乗り出す猫

騙されたとも知らないその姿は必死そのもの

本能に抗えぬ悲しいオスの性がそこにはあった。

「ハッ！」

とアルが騙されたことに気付く

が、

もう遅い。



そこには女性三人の白い目

「に……、ニャオーン……」

苦し紛れに猫のマネ

だが、

「最低だね」

「そうやな」

「あとで『お話し』しようか……」

黒いオーラーを放出する三人。

血も凍りつく

そんなオーラであった。

ガクガクと恐怖に体を震わせるアル

アル、お前のことは忘れないのである、と九郎は心の中で手を合わせる。

「まだ死んでねえよ！」

「いつの間に心を読むスキルを体得していたのであるか？」

「口に出てたぞ！」

「何と、そうであったか」

ゴホン、とはやてが咳払い

「まあ、そのどスケベの処分は後で考えるとして」

冷たい声音

頼むから助けてくれ、と視線で訴えかけるアルに

無理、諦めるのである

最後の希望が絶たれたアルは絶望していた。

「一つ確認するけど君の名前は藤見・九郎君やね？」

「確かにそうであるが・・・」

初見である筈の女性に名前を言い当てられ驚く九郎

「何故、吾輩の名を知っているのだ？」

「実はなこういうもんが来てるんよ」

スツ、とはやてが差し出したのは一枚の手紙

飾りっ気のないそれを開く

『九郎へ

ミットチルダには無事に着いたか、着いたならよし、着かなかったら・・・まあ、いいか。

何故、今回お前にこの用事を頼んだが、その理由を今から明かそうと思う。

それにはとても深い理由があるのだ。

昔、俺がまだ不良だった頃のことだ。

俺は相当のワルで色々やっていた。

ある時、俺はレジアスとかいう野郎の車をぶつ壊したことがあったな、それが高級車でしかも買ったばかりだった。

度量の小さいことにその野郎、損害賠償を要求しやがった。

当然、俺は逃げた。

だって貧乏だったんだもん

んで、とある理由で改心して俺は神父になったのさ。

そして、つい最近、ついに見つかっちゃった。

払える金はない、だから、俺はこう言った

「魔道士の素質がある奴がいる。それをあんた等に売るから勘弁し

て、はあと」と。

そしたら、奴さん達、喜んで帰ってくれた。

まあ、取り敢えず俺の借金を返すためにも頑張って働いてくれ。

そういうことだからしばらく帰ってこなくてもいいぞー

あなたの親愛なる神父様より  
『

茫然とする九郎

全然深くない理由とか滅茶苦茶な文章とか、内容とかではない。

何時の間にか自分が売り物にされ、

しかも、売られた先が管理局。

神父様曰く、「十歳代の子供を魔導士として採用するほど人手不足」

幸か不幸か、九郎は『一応』ではあるが、魔導士の資質を持っている。

当然、自分は最前線で闘わせられることになるだろう。

昔から他人と競争するのは好きだった。

でも、戦いは大嫌いだった。

自分が傷つくのが怖いから、他人を傷つけるのが嫌だから

そんな九郎にとって管理局での仕事というのは地獄以外の何物でもない。

その九郎を余所に

「とうわけで君の身元は今日からウチら機動六課で預ることに」となったから

「・・・認めぬ」

「君にはFWとして活躍してもらおうで、勿論、指導の方も」

「吾輩は・・・認めぬぞー!」

掛け蒲団が飛ぶ

フワリと舞う掛け布団

それを囿に九郎は窓枠へ足をかける。

「ちょ・・・ここ四階」

九郎のやらんとしていることに気づいたはやてがそう止めるが

I can fly!!

躊躇いもなく飛んだ

落ちていく

迫る地面

九郎は焦らずゆっくりと姿勢を整え軽やかに身を捻り着地

決まったのである！！

だが、

グギッ

「お・・・」

捻った

足首を

「・・・アホ」

窓から下を見下ろすアルがそう呟いた。

「ぬおおおおおおおおおおお！・・・」

叫びが病院に木霊した。

こうして彼は機動六課の部隊員となった。

時空管理局放送委員会

九郎「ということでお送りしました第二話どうだったか？」

アル「何かさ……」

九郎「……?」

アル「俺の扱い酷くね?もうちょっとさ、こっかッ」よく書いてく  
れても」

九郎、はやて『却下!!』

アル(うるうる、と涙目)

九郎「喜べ、今日からアルは下ネタ担当である」

はやて「それにあんたは一番怒らせてはならん人を敵に回したんや、  
覚悟しいや」

なのは「そつだよ、アルちゃんはね私を怒らせちゃったの、分る?」

レイジングハートでグサグサとアルの腹を突くのは、もとい・・・  
魔王様

気のせいか黒いオーラーが出ている。

アル「あ、何か・・・すごくいいかも」

何か上気しているアル

ピタリと止まる魔王様、排出されるカートリッジ

なのは「テイバイン・・・」

アル「え・・・、あ、今の冗談です。冗談ですから」

なのは「バスターーーーーー!!」

アル「いやっほーーーーーい!!」

吹き飛ばすアル、星になって夜空へと消えていく。

なのは「あれ、みんな凍りついた表情してどうしちゃったのかなあ  
?」

九郎、はやて『何でもありません、なのは様!』

なのは「そう?じゃあ私帰るね」

去っていくなのは



九郎「・・・常時、評価や感想、クレームやリクエストなども受け付けているのでどうかコメントの方、よろしくなのである」

九郎、はやて「それではまた次話でお会いしましょう！」

### 第3話

ミッドチルダはいつも通りの穏やかな朝を迎えていた

その首都、クラナガンにある機動六課の隊舎

「見つかった？」

オレンジ色の髪の少女、ティアナ

「全然、見つからないよ……」

その問いに答えたのは青い髪の少女、スバル

「全く……どこに逃げたのかしら」

「見当もつかないよ」

何か思い出したのかティアナはこめかみに青筋を浮かべ

「何であんな奴がこの部隊に……」

メラメラと怒りを燃え上がらせるティアナ。

「訓練で手を抜くわ、勉強が嫌だから逃げ出すわ……信じられないわ、全く！」

ははは、と苦笑いするしかないスバル

「でもティア、藤見さんって何か噂では借金のかたに無理やり入隊させられたらしいよ」

「あいつに、さん付はいらないわ」

「・・・本当に怒ってるんだねティア」

「当たり前よ、とティアナは真剣な表情」

「ああいつ不真面目な奴が嫌いなのよ」

「フォローしようとしたスバルは」

その時、近くに生えていた木が軋む音に気付いた。

「ベキッ」

「ぬあ！」

その木から落ちてきたのは人。

派手に尻もちをついたその人を見て反射的に

「藤見さん！」

スバルが呼んでいた。

「ま、マズいのである！」

苗字を呼ばれ、九郎は焦る。

「逃げるが勝ちなのである！」

と判断した九郎は即座に走り出す。

「待ちなさいアンタ！」

「待て、と言われて待つドロボウはいないのである！」

追いかけてくるティアナにそう言い返す。

「ッ」

その顔が怒りで真っ赤に染まる。

追う速度が上がり、距離が詰められていく。

どうやら火に油だったようで九郎は自分の発言を悔いた。

「絶対、捕まえてやる！」

確実に近づいてくる。

だが、

「甘いのである」

速度が上がる。

それも驚異的に、だ。

「ッ！」

「逃げ足速過ぎ！」

見る見るうちに二人の姿が小さくなっていく。

勝利を確信する九朗。

「藤見さん！」

その声に振り向いた九郎は己が目を疑った。

そこにいたのは赤毛の小さな少年。

しかし、九郎が驚いたのは少年、エリオ・モンディアルがいたことにではなく。

エリオの両手

その両手のパルチザンにも似た槍を見て

「デバイスとか反則なのである！」

思わず声を上げる。

「お願いです、今なら許してもらえるかもしれませんが。だから」

涙目で訴えるエリオ

何故に涙目なのであるか？

「嫌なものは嫌なのである！吾輩は絶対に逃げきってみせるのである！」

「仕方ありません、ストラーダ！」

爆音と共に槍から吐き出される魔力

刹那

急激に加速

さながらロケットのように迫るエリオ

あっと言う間に

絶望的な状況

だが、諦めるわけにはいかないのである

己が内に掛けられたリミッターを九郎は解除。

普段はいざと言う時のためにセーブしているそれを解き放った

生まれる加速

それは瞬く間にエリオを引き離していく

「ええええええええ！何ですかそれ！！！」

信じられない光景に思わず叫ぶエリオ

吾輩、逃げ脚で誰にも負けたことがないのである！！

事実、逃げ始めた九郎にまともに追い付けるものは今までいない。

父親代わりを務めてきた神父様でさえ真っ向勝負で九郎を捕まえたことはなく

罾を張るなどして捕まえていた。

ただし、この足の速さは逃げ脚限定で普段は全く生かされない。

「うはははは！今度こそ本当に、さらばなのである！」

遠ざかるエリオに向かってそう言い放つ。

加速は止まらず走り続ける九朗

その余波で風が巻き起こる。

そして、

運悪く、偶々近くを歩いていた女性職員のスカートをめくりあげてしまった。

赤！

反射的に見てしまった九郎

九郎も年頃の男

本人の意思に関係なく反応してしまうのだ

だが、それがいけなかった。

気を取り直し、正面を見た九郎は絶句する。

壁があった。

それも目の前に

脳裏に浮かぶのは、車は急には止まれない、というフレーズ。

成す術もなく九郎は頭から壁に激突

星が飛び散るのを九郎は見た。

フラフラと怪しい足取りで数歩下が

ボタン

仰向けに倒れ、九郎は気絶

その鼻からは紅い血が一筋垂れていた。



「で、何か言いたいことある？」

「……」

針のむしろというのだろうか

今の九郎の状況は正しくそれであった。

目の前にはフェイトがいる。

笑顔を浮かべたフェイトが

しかし、怖い

笑顔なのに不思議と怖い

そういう笑みであった。

というか殺気がタダ漏れである……

ユラユラと肩から漂う殺気に九郎は生きた心地がしなかった。

エリオが涙目で訴えたのはこういふことかと、九郎は今更ながら理解

密かに冷汗を垂らす九郎に

「どつして逃げたんや？」

と問うたのははやてだ。

「そんなもの決まっている。吾輩が嫌だからなのである、勉強も練習も」

そして何より……と九郎は

「戦いが嫌いなのである」

言い切る。

「それは誰だってそうや、けどな皆守りたいものがあるから戦うんや」

それは真剣な表情だった。

「それ位は分っているのである。ただ」

「ただ……、何や？」

「吾輩、この世界の他人が死のうが苦しもうが」

どうでもいいのである

そう言った。

次の瞬間

襟首が掴まれた。

そのままの勢いで強引に引っ張られた。

眼鏡が床の上に落ちた。

「あかん！フエイトちゃん！」

紅い瞳が睨んでいた。

真っ直ぐなその赤い瞳が、九郎の目を

「正直に言っただまでである」

「何で……」

静かに問うその声

「吾輩は我が身が可愛い。家族のためならともかく」

続けて

「見ず知らずの他人のために傷つくなど後免なのである」

目を逸らすことなく九郎は言った。

「……その家族っていうのは」

「神父様とそこに住む子供達のことなのである」

「その為になら君は戦えるの？」

九郎の脳裏に浮かぶのは小さな孤児院

その小さな世界が九郎にとっての全てだ。

故に

「勿論である」

と九郎は即答

「……」

「吾輩がここで戦う理由はない」

沈黙

誰も言葉を発さない。

否、発せられない。

そういう重苦しい空気が支配していた。

さて、どうしたものか……

九郎に罪悪感などない。

あるのは面倒なことになった、という思いだけ

重苦しい雰囲気の中、

「フェイトちゃん、離してやって」

絞り出すようなはやての声。

フェイトが渋々といった様子で襟首から手を放した。

「藤見君も戻ってくれてええよ」

「・・・了解」

落ちた眼鏡を拾い、ドアへと歩いていく。

「失礼しました」

最後に一礼

九郎はドアが閉じるとため息をひとつ。

『クビ』の一言

その一言が出るだろうと九郎は期待していた。

しかし、現実には『クビ』どころか何の御咎めも無し

さっさと『クビ』にしてお払い箱にすれば良い物を・・・

正直、戦闘は苦手だ。

かと言って頭は良くない。

魔力量も普通の魔導士の標準以下

そんな自分はお荷物以外の何物でもない。

まさかとは思うが、あの神父様がチビたぬきに嘘を吹きこんだのか  
もしれない。

そもそも

何もこういう仕事で借金を返す必要もない。

別の方法でもいいのだ。

命を危険に晒す必要は全くない。

そう考えるとさっさと『クビ』にして欲しいと思う。

「あの・・・」

その声に振りかえる。

そこにはエリオとキャロがいた

心配だったのかドアの近くで待っていたらしい

「大丈夫ですか？」

「大丈夫であるよ。怒らせてしまったかもれんが」

怒らせた、という言葉にエリオの表情が曇る。

「怒らせた……って何を言ったんですか」

「この世界の人間が苦しもうが死のうがどうでもいい、と。そう言ったのである」

「そんな……」

「本当にそう思ってるんですか？」

キャロが訊いてくる。

その継るような眼に

「吾輩はそういう自己中心的な人間なのである」

失望したような様子の二人

それを見て九郎は少し罪悪感を感じ。

「というのは全部真っ赤な嘘である」

と言ってしまっていた。

そうやってしまったのは、二人が孤児院の子供達と重なって見えてしまったからだろう。

内心、発言を悔いる九郎を余所に

「よかった」

と二人は微笑を浮かべる。

気が緩んだのか

グウー

腹の虫が鳴った。

二人、それも同時に

赤面する二人

「ぶっ・・・」

九郎は堪え切れず次の瞬間には笑い出していた。

「ひ、酷いですよ。笑わなくてもいいじゃないですか」

「そうですよ」

「無理無理、笑うなと言う方が無理である」

わ、笑いすぎて腹が痛い

などと思っていると

グウ

腹の虫が鳴く



それは九郎の腹から聞こえた。

一瞬にして顔が真っ赤に染まる九郎

『ぶっ……く、あはははははは！』

今度は二人が笑う番だった。

穴があつたら入りたい

そんなことを思う九郎であった。

白い

ひたすらに白い

壁や床、天井に至るまですべて純白

そこには影も闇もない

その白き空虚な廊下に行くのは一人の男。

靴音を響かせながらその男はゆっくりとした歩調で歩いていた。

「相変わらず退屈そうね、ミカエル」

「ベリアルか」

声を掛けた女性が微笑

燃えるような紅い髪の美女

大人の女性と言う言葉がピッタリ当て嵌まる。

そういう女性だった。

「で、『福音』の準備の方はどうなってる？」

「計画通りだ。何一つ狂いも無しに、な」

酷く冷めた口調にベリアルはクスリと笑った。

「計画通り過ぎてつまらない？」

「その通りだ」

「仕方がないじゃない。ミカエルが優秀だから」

嫌そうな顔をするミカエル

「だからつまらんのだ。余を含めたこの三千世界の全てが」

自分が優秀であると肯定するような台詞

その台詞にベリアルは嫌な素振りさえ一つせず

「他の使徒に聞かれたら殺されるわよ」

「いくら集まるうが雑魚は雑魚」

臆する色もなくミカエルはそう言った。

「凄い自信ね」

「自信ではない」

事実だ

断言するミカエル

その発言に虚勢という二文字はない。

「頼もしいわね。じゃあさっそく見せてもらいましょうか、その実力を」

差し出された書類

その書類を見て

「剪定？」

「そう、剪定。大事な任務でしょ」

「必要があるのか？」

「それを判断するのは私達じゃないわ」

さっきとは打って変わって真剣な表情のベリアル

「そうだったな」

「あと今回使うのは人じゃないわ」

「人じゃない・・・では、何を？」

「これよ、と渡された写真を見て

「ほう・・・」

その写真に写るのは丸いフォルムの機械、ガジェットドローン

「戦闘データーの方、くれぐれも忘れないようにしてね」

「分かった」

ミカエルは歩を返した。

その向う先はミッドチルダ、首都クラナガン

時空管理局放送委員会

九郎「ということでお送りしました第三話」

アル「おいおい、主役の俺の出番がないじゃないか」

はやて「嘘付けーーーー！」

バチーン

アル「いでえええええ、あ、頭から血の噴水がーーーー！！！」

九郎「それは何時ぞやの鋼のハリセン！まだ持っていたのであるか  
！！！」

はやて「それよりも今回の話は珍しくシリアスやね」

九郎「うむ、作者曰く『主人公の成長を書く』ということでごうい  
う話になったそうである」

はやて「問題はちゃんと収められるかやなあ・・・」

九郎「・・・たぶん、大丈夫だと思うのである」

はやて（めっちゃ不安やわ〜）

アル「って、コラ！その二人、怪我人があるのに何呑気に話して

るんだよ!!」

はやて「怪我人、って猫やん君」

アル「ハッ！そうだ、俺は猫だったんだ!!」

九郎「前回、魔王様・・・ゲフゲフン、もとい『なのは様』にぶっ飛ばされたせいで脳みそ壊れちゃったのであるか？」

はやて「おかしいのは元々からやろ」

アル「・・・あんまりだあああああー！ー！」

はやて「・・・行ってもうた」

九郎「常時、評価や感想、クレームやリクエストなども受け付けているのでどうかコメントの方、よろしくなのである」

九郎、はやて『それではまた次話でお会いしましょう!』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9980h/>

---

魔法少女リリカルなのは Blood Ruins Story

2010年10月11日22時04分発行